第4部　ふるさと恋し

禅 ZEN

鈴木大拙没後40年

■80　信心の里

『わたくしは鬼の子、仏の子』

鈴木大拙が長兄を頼って珠洲で暮らしたのは、一年足らずであった。母のいる金沢に近い美川の小学校に転任し、母の死を機に上京する。その後、墓参などで里帰りすることはあったが、十代のひとときを過ごした海辺の街に足を伸ばすことはなかった。

大拙は信心の人とたたえた栃平ふじ

が、大拙と珠洲とのきずながそれで切れたわけではなかった。「わたくしは鬼の子、仏の子」と信心を歌った女性が、かつて親しんだ土地にいることを知り、大拙は「実に立派な信心」とたたえて広く紹介するとともに、自分の思索を深める一つの財産にした。

同時代に生きる

珠洲市宝立町柏原で暮らした栃平ふじという女性が、その人。大拙が英語の助手を務めた飯田小学校から南西へ約六キロ、見附島を正面に臨む集落で、大拙の死の前年に六十九歳で没した。生年は一八九六（明治二十九）年で、大拙が鎌倉で渡米の準備を進めていたころである。二人は、ほぼ同時代に生きたが生前、出会うことはなかった。

大拙は著書『妙好人』で、辺鄙な田舎に育ち、若い時から並々ならぬ苦労をせられた、と、ふじについて述べ、折々に書き留めた信仰告白の歌をいくつか紹介する。

その一つが「わたくしは、鬼の子である、親である。懺愧、歓喜のお念仏」という歌で、「わたくしは、仏の子である、親である。清き歓喜のお念仏、なむあみだぶつ」と続く。土地の真宗関係者を通じて、ふじの歌を知った大拙は、「これは容易ならぬ他力の信」と、深く感動する。

当て字も交じる

ふじは、初等教育も満足に受けることのできぬ逆境の人であった。残された歌には誤字や当て字が交じり、意味が取れぬ言葉もある。大拙は東西多くの書物に学び、禅の世界、東洋の心について思索を続けてきた人である。その生涯の歩みで見つけた宝物の一つが、稚拙な文字で記されたふじの歌であった。大地にしっかりと根を張った心でなければ本物ではない、と、大拙に繰り返し語らせた歌である。

ふじの長男万遍さん（元）は、裏表に信心の歌が書かれた粗末な紙片などを、形見として大切に保存している。「母は熱心に『お座』に出かけていたが、人に信心を語ったりはしない、もの静かな人でした」と言う。

「お座」とは、布教師を招いて法を聞く場。珠洲・西勝寺住職で宗教民俗に詳しい西山郁史さん（元）によると、能登・加賀の地で、いまも息づく祈りの世界だという。

九十五年の大拙の生涯からすれば、まことに短い暮らしの日々であったが、当時は知るよしもない機縁で珠洲の里とは深く結ばれることになった。（酒井忠伸）

じが暮らした里。見附島を望んで景が広がる　＝珠洲市宝立町柏原